

夏の大会 GREEN PRIDE ～ 大楠高校に誇りを持つ ～

3月31日指導者の1人が人事異動のため大楠高校を去ることとなった。その先生は、この野球部を大きく前進させ、生徒からの信頼も厚く、選手の精神的な支えとなっていたため、選手たちは寂しさを深く感じていたが、前を向き、この出会いに感謝し、夏の大会でその感謝を表現しようと誓っていた。4月になり7人だった部員が、6名の新入生を迎え入れ、13名となった。また人事異動により熱心な指導者が2人もやってきたのだ。大楠高校にまた新たな風が吹いてきた。4月当初は、新入生6名を教えながらこれまでの練習をやらなければならなかったため、今まで7名でやっていた練習とは勝手が違い、戸惑いを見せる選手もいた。しかし、それ以上に13名いることにより土日の練習試合はそれぞれ2試合ずつこなし、5月の連休には6試合もこなせるようになった。勝つために毎日練習を積み重ねるという実感が強く湧いてきて、士気も高まっていた。

6月、いよいよ夏の大会まで1ヵ月となった日、チームで練習日誌を書いてみんなでまわすことをはじめた。日誌の目的は、1日1日をしっかりと振り返ること。自分の考えを文字にして発信すること。他人の考えを認識することだった。表現することが苦手な選手がほとんどで、ましてや文字にすることになるとどうなるのかと指導者達も心配しながら日誌を開始したが、いざ内容を見てみると勝敗についてやプレーについてのことはもちろん、イライラしてしまってプレーを諦めてしまったり、挨拶がしっかりとできなかったと自分の内面や行動についての反省も書かれていた。心配とは裏腹にしっかりと自分の弱さ、仲間の気持ちを受け止めようとしていた。練習試合の結果をみても、選手達の精神的な部分をみても勝ちにはまだまだ遠かったが、1歩ずつ選手達の今までにない成長をみて、15年以上遠ざかっている夏の大会での勝利が近づいているように感じた。



7月13日、保土ヶ谷球場で夏の大会1回戦、相手は氷取沢高校だった。保土ヶ谷球場での試合では、今年も保護者はもちろん合唱部、吹奏楽部、生徒会、サッカー一部や有志の生徒などたくさんの方が応援に駆けつけてくれ、さらにt v kのテレビ中継が入り、選手たちの気合いと緊張は最高潮に達していた。夏の大会は、3年生にとって高校野球ができる最後の舞台である。これまでの思いを胸にただただ、野球を楽しんで、笑顔で試合をしようと思った。しかし、試合の立ち上がりには気持ちが空回りし、2回までに8失点。このまま10点差で5回コールドで何もできずに

あっけなく終わってしまうのか。そんな雰囲気ベンチ内に漂った。そんな時、キャプテンだけは笑顔でプレーを続け、周りの背中を押し続けた。すると他の3年生達からも笑顔が出始め、何本かのヒットも出始めた。5回が終わり、まだ下を向く2年生に、「この試合が3年生との最後になるかもしれないのにそんな顔でプレーして、後悔しないのか。」と激がとんだ。そこから、チームが持っている本来の力を発揮し始めた。6回には2点を返し、全員が笑顔で、野球を楽しもうと前を向き始めた。そして、7回の守備、1死2,3塁、痛烈な打球が左中間へ跳んだ。抜ければコールド負けで試合終了。ベンチもスタンドも試合が終わったと諦めたその時、キャプテンが見事なダイビングキャッチ。そして、後続を断ち、ベンチに満面の笑顔で帰ってきた。その表情はとてキラキラとしていて、球場中が感動し、拍手を送った。しかし、ここまで粘りを見せたチームだったが8回裏にタイムリーヒットを許し、試合終了となった。

試合が終わり、保護者はもちろん応援に来たたくさんの生徒の前で3年生の選手3人とマネージャーが1人ずつ感謝の言葉を伝えていった。涙があふれていたが、笑顔で堂々とした姿で語るその想いは、応援に来た人たちの心にしっかりと伝わっていた。中でも、大楠高校の野球部を支えてきた3年生のマネージャーは最後まで涙を必死にこらえ、自分の役割をこなそうとしてくれた。この最後の試合を通してさらに彼らは成長していた。この2年半の高校野球は、きっと彼らの今後の人生において、誇りとなる時間となっていくことだろう。そして、その姿をみた下級生がどんな成長をしてくれるのか楽しみである。

